禅昌寺通信「道心」第20号
編集　日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行　平成18年1月1日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822
E-mail : zenshoji@bronze.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.zenshoji.org/

改歳之令辰

祈り

国土安穏　万邦和楽
民衆康寧　福壽無量

今年も相変わらずの
ご厚誼をお願い申し上げます。

平成十八年 元旦

山主　横山　正賢

「歳改まるこの時」というのは厳かに迎えたいものである。何故かというとたとえば、

自分自身を改善したいこと、本棚や書類の整理など明日は・来週はと毎日のように思いながらも、なかなか出来ない事を、暦の改まる時に意を決するという特別な思いがおきる時ではなかろうか。

子供のころ歳末となると「誓文払い」といってどこの町の商店街でも大売出しで賑わった。私世代の育ち盛りの頃は、「生めよ増やせよ」の国策に乗ってどこの家でも子沢山だった。私などは五男二女の次男として育ったから、着る物は全て兄のお下がりで、新しいものを買ってもらったことは、学校の入学の時くらいだったように思う。そんな暮らしの中で年に一度だけ「誓文払い」の時には、下駄・足袋・手袋などを買ってもらった記憶が鮮明に残っている。

本家といわれる家のお正月は、親戚が多く集まってくる。子供たちにとってはお年玉を頂く、一年のうち最高に楽しみの時であった。

「誓文払い」というのは、広辞苑によると「陰暦の十月二十日に京都の商人・遊女などが四条京極の冠者殿に参詣し、日ごろ商売上の駆引きに嘘をついた罪を祓い、神罰の放免を請うた行事。この日、京坂の商店は特に安価の売出しをした」ことによると言われる。

子沢山の親たちは、日ごろ子供達にほしい物をおねだりされても、「分かった、分かった、そのうちに」と欲しがる我が子を、だまし、だまし「誓文払い」の安売りの日を待って子供への罪滅ぼしをしていたのかもしれない。

「欲しがりません勝までは」の軍国教育と言われた、耐える教育を強いられた世代が、世界一の経済大国、豊かで平和な日本を築いたことは誰もが認めるであろう。

いま豊で平和国家と世界の発展途上国の人々の羨望となっている日本は如何なものか。

私に授かっている寿命は、あと幾歳月残されているかは分からないけれど、祖先はどんな困難な時節にあっても、未来に期待をし、祈りをこめていたであろう事への思いを新たにし、知性を持つ人間として子孫へ伝承する生き方が、問われているように思う。

昨年の「祈り」は

世界が平和になりますように
自然を敬い互いを敬い
生きとし生けるものが
在るがままに輝き
生かされる世界を
創らねばならない　と

祈りをこめたのではあるが、世界の葛藤は尽きず。国内にあっては幼い子供の命が脅かされる現状は、被害者の立場は言うまでもないが、加害者となる人が育った過程も、他人事ではなく、己の子育ての再確認が問われているようにも思う。

一昨年、昨年と世界各地で起こった地震等天変地異の著しいことを思うと、ただ祈りをこめるのみである。

秋の章 第15話

いつ迎えが来てもかまわないほど、あなたの人生は充実していますか。

愛知専門尼僧堂堂頭　青山　俊董

浜までは
　海女もみの着る
　　時雨かな

これは播州の瓢水という人の句です。千石船五艘もあった財産を風流で皆なくし、

　蔵売って　日当たりのよき　牡丹かな

と吟じるほどに、執着を去った人で、やがて仏門に入りお坊さんになられました。

その透徹した境涯を慕ってある日、一人の雲水が訪ねてきました。瓢水はたまたま風邪薬を買いに出かけてお留守でした。「高い噂を聞いて訪ねて来たが自分の生命に執着があるようでは大した人ではない」と見て帰ってしまった雲水に、瓢水が贈ったのがこの句であったといいます。

いずれ海に入って濡れるのだから、浜までのしばらくを時雨に濡れて行ってもどういうことはなかろうと思いがちですが、そうではない。健康な体あってこそ仕事もできる。その大切な体を意味もなく濡らすような心ないことはしない、というのです。

この体あって仏法が聞け、仏道を行じ、人々に伝えることもできる。そのためには命を惜しんではならないが、だからこそこの命を惜しみ大切にせねばならない。小さな私一個のために命を惜しむのではなく、仏法のために命を惜しむというのです。

不惜身命なるがゆえに惜身命

私は十六歳の春、頭を剃って名古屋の修行道場に入りました。五歳の時から空気のきれいな信州の山寺で、新鮮な野菜をお腹いっぱい食べて育った私が、急に都会のそれも終戦直後の極めて食糧事情の悪い時に、さらに輪をかけて粗食な道場へ入ったものですから、たちまち病気になってしまいました。医者から肺浸潤だの心臓肥大だのといろいろな病名をつけられ、階段の上り下りさえも大変なほどに体力を落としてしまいました。でも私はとにかく一生懸命修行したいばかりでしたので、一朝も一晩も休むつもりはありませんし、まして病気治療のために休暇をとるなどということは夢にも考えませんでした。ある日、尊敬していた先生に、「道元禅師さまは『不惜身命なるがゆえに惜身命』と仰せられた。仏法のために身命を惜しんではならないが、仏法を背負う体だからこそ、自分の体を惜しみ、大切にせねばならないのです。家へ帰って静養してきなさい」と厳しく、しかしあたたかく説得されました。「仏法のために身命を惜しめ」の一言でスカッと決着がつき、即座に道場を後にし半月ほどでしたが母の元に帰り療養したことでした。

何故に、この体を大切にせねばならないのか。

この体を、何に使おうとしているのか。

大切なのはこの一点なのです。

私の知人の寺に次のような言葉が書かれた額

が掛けてありました。

《五尺の躰借用證文》

「地水火風　煩悩具足の身　右は仏法聴聞の御用につき　借用つかまつり候。

しかるに老少不定の世界に候間　無常の風吹き次第　何時にても御返済申すべく候事　実正なり」とあり、さらに

「ただし利息として王法を本とし　きっとあい守り申すべく　もし怠惰にあい暮らし　行じがたく修しがたく　現世祈祷あいつのり、祖師の真俗二諦の御教義にあい背き候えば、なんどき無間地獄に御引き取り下され候とも、一言の不足も申すまじく候

よって後日のために一札件の如し」とただし書きをそえてあります。

借用主は「娑婆国浮世郡御法義町其甲」とし、宛名は「冥土国　閻魔大王殿」とあります。

私だけの力で生きているのではない

この五尺の体、わがままな私の、ああしたいこうしたいの欲の満足のために使うのではない、名誉や金儲けのために使うのでもない。美味しいものを食べたり、高価な衣装や装身具を身にまとうためだけの体でもない。まして人を傷つけたり苦しめたりするためでもない。いちばん大切な天地の道理をそれによって生かされている人のあるべきようをそれを仏法というのですが、その仏法を聴かせてもらうためにこの体をお借りするというのです。しかし〝無常〟の世の中、老人や病弱な者から先に亡くなり、若い者、健康な者が後と決まったものではないから、ひとたび〝無常〟の風が吹いたらいつでも文句なしに私が借りている命をお返しするというのです。また教えに背いたり、怠ったり、間違った教えに走ってしまったりした時は、いつなんどき無間地獄へ引き取ってくれても、一言の文句も言わない、と、冥土の国を司る閻魔大王に誓っているのです。

この体は、何に使うために大切にするの？

あなたはこの「天地さまからお借りしている」ご自分の体をたった一つの、たった一度のこの体を何に使おうとしておられるのでしょうか。いまひと時のさびしさや孤独を紛らわせるための快楽のために？それともお金や名誉を手に入れるためにでしょうか？いずれもむなしいですね。いちばん大切なことのためにこの体を使いたい。借用證文を遺した方は「仏法聴聞のために」とおっしゃる。もちろんこれは仏教の修行に限ったことではありません。

この世にあっていちばん大切なこと、最高の生き方、最後の落ちつき場所――それを求めるために、仏さまの教えに耳を傾け、実行し、悔いのない一日一日を送るためにこの体を拝借するというのです。さらには無常の世のなら、お迎えが来た時はいつでも文句なしにこの体をお返しするということです。この覚悟、できていますか？できていませんね。「今、お迎えに行ってもよろしいですか？」「ちょっと待ってください」とうろたえ、いつでも都合悪い私がいるばかりです。

證文のただし書きがまた凄い。怠った時、教えに背いて間違った道にそれてしまった時はいつ何時でも無間地獄（休みなく苦しみが続く地獄）へお引き取りくださっても一言も不平は言わないという。この腹のすわりも見事です。どういう結果が出ようと自業自得、無条件に受け、針の山登りであろうと、釜ゆでであろうと勤めあげてゆきましょうというのです。この体何に使うか、何に使うがために大切にするのか。いつお迎えが来てもよい、という覚悟はできているか。道にそむいて生きた場合、いつ地獄へ落ちても文句は言わないの決定ができているか。この三点（または四点）だけは毎日、我が身に問い続けながら生きていきたいものです。

※（本文は、青山俊董尼老師著「悲しみはあした花咲く」光文社より抜粋したものです。）

奥の細道

松尾芭蕉

【月日は百代の過客にして】

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ。馬の口とらへて老いをむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそわれて漂白の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に、白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて、心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず。

股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて三里に灸をすうるより。松島の月、先づ心にかかりて、住める方は、人に譲り杉風が別墅に移るに、

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

面八句を、庵の柱に懸け置く。

——旧漢字・旧かな使い・
送り仮名・原文のまま——

【通釋】

月日は、永遠の時を過ぎ去つて行く、旅人のやうなもので、來ては去り、來ては去りして行く年も、また旅人と似てゐる。旅人と云つても、舟乗りとして、船の上に一生を送る者や、馬子として馬の轡をとつて、生涯を終わる者は、全く、毎日旅の空にあつて旅を自分の住家としてゐるのである。昔の人も多く死んでいる。

自分も、いつ頃のことからか、旅をしたいといふ気持がして、あの一片の雲が風のまにまに、空を流れて行くのを見ると、自然と心をひかれて、諸方をさまよひ歩きたいという旅心が湧いて來て仕方がない。

去年は、あちこちの海岸をさまよひ、秋になつて、隅田川畔の庵にもどつて、蜘蛛の巣を拂つて、久し振りに落付いたが、その年もようやく暮れ、霞の立つ春空になると、白河の關を越えて、奥州に遊ぼうという気持が起こり、何とはなしに身邊の物に、神がのりうつゝて自分の心を誘ひたて、道祖神が招くので、何をしてもソワソワして、心を落付けてゐることが出来ない。

股引の破れを繕ったり、笠の緒をつけかへたり、三里の灸をすゑたりして旅支度にかゝつてゐるうち、もう、松島の月景色はどんなにか美しからうと、心に浮んで來ては消えず、草庵は人に譲つて、杉風の別荘にうつゝた。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

の、句を發句として、表八句を書いて庵の柱にかけて置いた。

以上

【奥の細道・紀行抜粋句】

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家
行く春や鳥啼き魚の目は泪
あらたふと青葉若葉の日の光
夏草やつはものどもが夢のあと
五月雨をあつめて早し最上川
閑さや岩にしみ入る蝉の声
荒波や佐渡によこたふ天の川
あかあかと日はつれなくも秋の風

この「奥の細道」の、序とも見るべき一節で、只管に旅に對する憧れが、読みとれ、簡潔な流麗な一字一句の中に、芭蕉の性格が、よく窺はれ、漂白の旅人であったとも云えます。元禄二年一六八九年三月江戸～八月の大垣迄、八十ヶ所に及ぶ、諸国行脚のなか、大自然に委ね詠んだ、「侘び・寂」の俳諧は、切手にもなり、皆様もよく、ご存じと思います。

(右に一部載せました)

私が「奥の細道」の本を手にしたのは終戦の四年後でした。当時の本は小さく、ざらざらで紙質も悪く年月を得た現在は、表紙も取れ、哀れになっていますが、芭蕉の文学に對し、尊敬の念と人間味を愛好し、いま一度「奥の細道」を振りかえってみました。

東区　矢野　淑子

松笠山

松笠山の会　道菅通博

禅昌寺の裏山を松笠山といいますが、この山は古来、里山として近在の人々と生活、宗教、政治のあらゆる面で深い係わりをもってまいりました。山上には、観音堂、三鬼堂、稲荷祠等々が祀られており、観音堂の外壁にかけられた案内板がその歴史を物語っております。そこで、松笠山にまつわる歴史話から一席。

観音寺の庫裏の脇に、平成三年の台風十九号で倒れた大杉の切り株が残っておりますが、つれづれなるままにその年輪を数えられた斉藤昭夫氏によると、樹齢は約三百五十年とのこと。また、鐘楼脇に切株の残る大松もその様相からして同様の樹齢と思われます。

大杉の隣にあるモッコク、イヌマキ（十九号で倒れる）、本堂裏のヤマモモやいちょう、鐘楼下のアベマキ、椿、庫裏の裏や釈迦堂裏のもみじ、庫裏脇のカリンなどもその樹齢からして、古くからここに生えていたものと思われます。その他、さかき、しきみ、りょうぶ、たぶの木、えのき、ひのき等々と植生が豊富でありますが、お寺の聖域として守られたからこそこれらの樹木が現在まで残ったものと思われます。

また、境内を覆う椿の林は、春になると品の良いみごとな花を咲かせますが、本堂裏のやまももと同じく、広島城の東北、鬼門を護る霊樹として植えられたものともいわれます。

それでは、大杉の年輪が物語る三五〇年前いったい何が起こったのでしょうか。

昔は、といっても、つい三〇～四〇年前までそうですが、燃料として薪を使っていたので、近在の村々の人たちは、この山に入って木を伐っていたのでしょう。また、今と違って化学肥料のない時代ですから、田んぼや畑の収穫を上げるためには大量の草を土地にすきこむ必要がありました。牛馬の餌としても必要であったでしょう。近隣の小田、矢口、戸坂、温品はもとより、川向こうの中筋や東野、古市のあたりからもお百姓さんがやってきて草木を伐っておりました。それだけに、住民同士の争いも跡を絶たなかったようです。

また、草木を伐ることによって山が荒れ、雨季には毎年のように山崩れによる災害を引き起こしました。

江戸時代の初めごろ（今から三五〇年ぐらい前！）、境界をめぐっての住民の争いが余りにも激しかったため、また、伐採や開発による山の荒廃と土石流による災害も大きな原因であったと思えますが、この一帯に領主が松や杉を植林したうえで、御留山（おとめやま）として入山・伐採を禁止し、お堂を建てて聖域としました。それにより、山が更なる荒廃から護られ現在の境内叢林が形成されたものと思われます。地球規模での荒廃に悩む我々現代人にとっても、大いに示唆を与えてくれるお話です。

なお、御留山とは、藩用材確保のため伐採を禁じた山。あるいは、もと農民が入会の野山として利用していたのを、水源涵養や砂防など治山のため、又は山論（境界争い）を避けるために、入山・伐採を禁じた山のことです。

その結果、明治の頃にはこのあたりは樹齢二五〇年にもなる大松あるいは大杉が林立していたようです。今に残るのは二つの切り株のみとなってしまいましたが。

それでは、なぜこれらの木は伐られてしまったのでしょうか。このなぞを解く鍵が本堂裏の石碑に残っております。

麓の村小田は、毎年のように太田川の水害、松笠山の崖崩れに見舞われ、その復旧に苦慮してまいりました。そこで、明治の中ごろ、この山の国有林を払い下げてもらい、ここで木を育てて、それを売り、災害復旧の元手として蓄えることとしました。そして、国有林を払い下げてもらうために、二五〇年前に植えられた松や杉を伐採して、このための費用を捻出したとのことです。

皮肉にも、災害を防ぐべく先人が二五〇年の昔に植樹し護り続けてきた木々を、今日の私たちが災害復旧のために伐採せざるを得ないとは、つくづく人間の営みと自然の営みの折り合い難い事を考えさせられます。

なお、戸坂と小田の境界争いは明治になってからも再燃し、法律によって解決がつかないため、両村の力持ちが相撲を取って決着をつけたという言い伝えが残っております。明治九年の話だそうです。

この相撲で、小田が勝つことによって現在の境界が確定し、松笠観音寺界隈は小田のものになったとのことです。

◆道心・趣味の会◆

俳句

●福寿草　地はほゝえみて　在りにけり

●雪の上に　降り積む雪の　白さかな

●魂の　飛び出しにけり　大くさめ

廿日市市　伊藤　順二郎

●お茶席の　露地に敷きたる　紅葉かな

●開け放つ　雪見障子に　庭映える

東区　青笹　俊枝

短歌

●日本水仙の
香のするような　夫の歌集
茂吉「赤光」の　横に納めぬ

●雪の道　その底までも　いとおしむ
金子みすずの　詩「積もった雪」

東区　矢野　淑子

◆年間行事案内◆

●春彼岸法要

〔日 時〕三月十八日（土曜日）
午前十時半より法要、法話十二時迄、護持会員は引続き総会

●寡婦の会発会準備会

〔日 時〕四月十五日　土曜日　十時より
最近寡婦となられたお方から不安等からご相談を受けることが多くなりました。そんなことから同じ境遇の方々が月に一度でも寄って手作りの食事会などすることから交歓会を開催しては如何かと考えております。
具体的なプランが出来次第ご案内いたします。

●春秋の日帰り旅行

春は四月・五月の内に秋は十月・十一月のうちにと考えますが。行き先につきましては、皆様の行ってみたいという所がありましたら、三月檀信徒総会までにお寺の方へご提案下さい。

●ハイキング・登山の会

四国霊場巡りの旅が続いておりましたので暫くお休みをしておりました。三月頃から再会したく考えております。

●高野山お礼参りの旅（一泊二日）

四国八十八ケ所巡拝終了後は、高野山金剛峰寺にお参りするのが、古くからの習わしといわれますので企画しました。
個人的に八十八ケ所のお参りを終えた方も、どうぞ遠慮なくご参加下さい。
〔日 時〕四月八日(土)～九日（日）
〔行 先〕和歌山県 高野山 金剛峰寺
〔参加費〕三万五千円
※旅行の申込み・お問い合わせは、お寺までご連絡下さい。
電話 〇八二-二二九-〇六一八
（詳しいご案内をお送りします。）

■毎年恒例行事

●青山俊董老師講演会

〔日 時〕二月二十八日（火曜日）
午前の部　午前十時半～十二時
午後の部　午後一時半～三時
（坐禅をされるお方は九時より）
参加費　二千円
（午前・午後のみの方は各　千円）
昼食代一人　百円
※昼食は持参されても結構です。
（お茶はご用意致します）
◎昼食が必要な方はお電話にてお申込み下さい。

●お月見コンサート「Tsukimi in 寺」

〔日 時〕十月七日（土曜日）
フルートは、例年同様エリザベト音楽大学 大代啓二教授、今年はピアノ演奏者としてＮＨＫ等で著名な青島広志先生とジョイントコンサートの予定です.

■毎月恒例行事

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回　第二又は第四金曜日を予定　午後二時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加下さい。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招いて練習　昼まで
◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合もあります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

■毎週恒例行事

●暁天坐禅会

月曜日～金曜日
毎朝午前六時～四十分まで

●水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会
終了八時半

●婦人坐禅会

毎週金曜日
午後一時より坐禅・茶話会　終了三時（第一金曜日のみ坐禅の後、写経、茶話会）

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。